

京都大学	博士(文学)	氏名	野 末 紀 之
論文題目	文体のポリティクス — ペイターの闘争とその戦略 —		
(論文内容の要旨) (序論)『ルネサンス』(1873)刊行後、ペイターは保守派によるさまざまな批判を受けた。そのなかには「結語」の思想にたいする道徳的非難だけではなく、文体にかんする批判もあった。1874年の「ワーズワース論」、1878年の「イギリスの詩人」と「恋の骨折り損」、1883年の「ロセッティ論」、1885年の『マリウス』のなかの「ユーフェイズム」、1888年の「文体論」、それに1893年の『プラトンとプラトン哲学』の最終章「プラトンの美学」において彼が独自の文体観を展開し先鋭化してゆく動機として、保守派による『ルネサンス』批判への反論という側面が見てとれる。そのあとをたどり、ペイターの闘争戦略を明確化するのが本論文の目的である。 (第一章) まず、『ルネサンス』刊行の直前に行なわれた R. ブキャナンによるロセッティ批判「詩の官能派」(1871/72)やその他の批評家による反唯美主義の言説を確認する。というのは、ペイターは自分だけではなく、ひろく唯美主義の擁護のために反論を行なっているからである。ブキャナンら保守派の指摘する唯美主義の問題点は、そのあまりに官能的な題材のほかに、仲間内だけにしか通じない意味の曖昧さであり、平明率直とはほど遠い、華美な、または精巧すぎる言語(ユーフェイズム)であった。それは、個人の想像世界や官能への耽溺による非活動的性格や非社会性、非国民性の指標である。つまり、文体が批判の重要な対象となっていたのである。 反唯美主義の視点は「古典的共和主義言説」と言ってよい。これは、法と人民による支配を重んじ、共同体維持のための公的活動を成員に要求するものであり、それを阻害する内面への沈潜や少数者による秘密の保持といった個人主義的なあり方を「病的」で「めめしい」と見なす。ブキャナンの「官能派」批判にもこれらの語が頻出するが、この「男性性」からの逸脱をあらわす語にかんして注目すべき点は、「詩の官能派」における S. ソロモンをめぐる記述である。そこには、ジェンダーのみならずセクシュアリティ規範への侵犯(ホモセクシュアリティ)にたいする不安が見え隠れする。総じて、保守派による批判には「官能派」が国民全体に悪影響を及ぼすのではないかと不安が見られる。 同様の言説によりペイターを批判したのが W.J. コータブである。彼は、モナリザの一節について内容の貧困を隠蔽する「詩的散文」だと批判し、また「非社会的な人生観」「懷疑と官能への傾向」「奇妙に気取った言語」を示す現代の詩と文化の代弁者としてペイターを非国民と非難した。 (第二章) 1877年、ペイターは W.H. マロック作『新共和国』の登場人物ローズとし			

て戯画化される。ローズの語る言葉は『ルネサンス』からの借用あるいは変奏であり、戯画的な要素も見られる。この人物は無気力で、夢見るような態度と気取りによって「めめしさ」を印象づけるだけでなく、性的な刺激に敏感に反応する。そこには女性の裸体やエロティックな書物への嗜好とともに、同性愛（少年愛）への欲望も書き込まれている。

（第三章）文体をめぐる保守派との闘争のために、ペイターはいくつかの戦略を取る。過去と現在の偉大な作家を流派に関係なく唯美主義の「伝統」に位置づける横領の戦略や、保守派の批判をいったん許容したかに見せたあとでその価値観を切り崩す、擬態としての譲歩という戦略が典型的である。また、テキストのなかに、少数者であることへの誘惑のメッセージを示し、一般読者とは異なる特別な読者に向けた言葉を目立たぬかたちで書きしるすことで、二種類の読者という考え方を主張し、かつ実践している。ペイターは、保守派の発想の土台となるさまざまな二元論（肉体と精神、形式と内容、「男性性」と「女性性」あるいは「非男性性」）にたいし、両者の融合のイメージを提示するか、脱構築を行なっている。保守派の重視する「行動」にたいしては「観照」を対峙させ、それをあらたな道徳性として設定し（「ワーズワース論」）、「平明率直」にたいしては「透明」「率直」というほぼ同じ言葉を用いつつ、それを作家の内的ヴィジョンと言語との対応関係の謂いへと変化させる（「ロセッティ論」『マリウス』の「ユーフェイズム」）。言語の「気取り」「不誠実」として批判されたユーフェイズム（と唯美主義の文体）については、その弱点を批評的な時代の「玩具」として許容しつつ、根本的には「誠実」な文学的営為として書きあらためるのだ（「ロセッティ論」「ユーフェイズム」）。挑発的なのは、保守派の規範としてのグレイやホメロスを「気取った」文体家として横領する試みである。それは括弧内で行われ、またつかの間の問いという目立たぬかたちで行なわれている。これじたい少数読者に向けられたメッセージである。

（第四章）ペイターは『ルネサンス』第三版の「結語」への注で、ここの思想は『マリウス』で「もっと十分に扱った」と述べている。両者を思想と表現の点で比較したB. A. インマンは、思想内容は同一であると述べているが、はたしてそうか。後者には前者のような、主体を印象の瞬間的な生成と解体の場にとらえる急進的思想や、反復される死への切迫感が出てこない。それに代わるのは「受容能力の育成」「生の充実」といった抽象的な表現である。一方でペイターは、抽象的な方式の解釈は各人の気質によるという見方を示す。つまり彼の戦略は、「快楽」の解釈を批判者や読者の気質に委ねてしまうことである。「再考」という章で、マリウスは自己の哲学（唯美主義）の狭隘さを自覚し、伝統的な宗教や道徳への譲歩を行なっている。が、それをうながす論理は「経済」という功利主義である。マリウスは唯美主義の根本的欠陥に逢着してこれを反省するのではなく、宗教や道徳の美的効用に目を開かれたにすぎない。またペイターは、キレネ主義は若者に特有の哲学で、いずれは大きな制度のなかに包摂さ

れると晦渋な文体で語ること、唯美主義の反道徳性への非難をひそかに緩和しているのである。

（第五章）「文体論」における保守派との闘争については先述したが、同時に問題点があることも否定できない。「良き散文」の条件としての論理性が実現されていないこと、ドライデンの「詩的散文」への奇妙な揶揄、「銜学」を否定しつつ銜学的記述を行なうこと、それに最終段落における唐突な飛躍などである。これらは、保守派との闘争がペイターの意識の深層に投じた影、すなわち過剰な自己防衛の痕跡かもしれない。

ペイターは「良き芸術」に必要な条件として装飾の省略に言及したのち、その許容についても述べている。それをするす散文にはいくつかの比喻表現が用いられ、また構文上、メッセージの速やかな理解を阻害する要素がふくまれている。彼の結論は、単語じたいに詩の要素があるというものだ。とすれば、詩的要素を排除したはずの散文にも詩の要素が存在していることになる。これは、モナリザの一節を内容の貧困を隠蔽する「詩的散文」と非難したコータプへの反論である。ペイターは、単語の起源や効果にかんして注意ぶかい学者を「男性的」とし、暗に「軽率な知性」を「女性性」として規定するが、誘惑されやすいのはむしろ少数者の学者の方であろう。ペイターの主張はみずからの実践によって裏切られ、ジェンダー規範は根底から覆されている。つまり、ここでは彼の主張よりも表現行為そのものが戦略的な効果を発揮しているのだ。

（第六章）J.E. アダムズが指摘するように、ペイターは「男性性」の再規定を行なうさい、ヴィクトリア朝の規範的「男性性」である「抑制」を利用しているが、ギリシャ以来の規範である知性や論理もまた取り込んでいる。しかし、これらにはたえず「めめしい」特質がつきまとい、「女性性」との並存が示されている。『マリウス』の第十四章「男性的娯楽」では、円形劇場で行われる動物や人間への「見世物」という名の殺戮行為が取上げられる。ペイターの批判の対象は、傍観している皇帝をふくむ観客の「鈍化した想像力」だ。それは「盲目の罪」とされるが、この道徳的視点は美的印象主義に重ね合わせられている。これを「男性的」と呼ぶのは、唯美主義者を「めめしい」とする保守派への反論であり、「鈍化した想像力」はコータプのペイター批判の言葉「分析的想像力」への切り返しと解釈できる。「男らしさ」に対抗して強調されるのは「共感」である。が、この女性的特徴は「男性性」の補完物ではなく、より広い人間的特質として対置されている。

ペイターが「男性性」の再規定に利用する論理や知性は具体的なかたちであらわされてはいない。「再考」におけるマリウスの認識が「実践の変化というよりも共感の変化——共感のあらたな出発、拡大」であったと語られているように、作品中に際立っているのは「共感」の方である。また「自制」は、マリウスにとって友人たちの魅力の源泉であり、群衆の「鈍化した想像力」に対抗する「選ばれた少数者」どうしの内密な交流を可能にするものである。そこには、演技性という保守派からすれば「めめ

しい」特質がまとわりついている。

『プラトン』の「ラケダイモン」の章でペイターは、他国より繁栄するスパルタ人の真の特質を「戦闘と男性的精神」ではなく知性に見ている。また、哲学による彼らの繁栄の要因として、それを外部に秘密にしておいたことをあげる。ペイターは、知性や秘密など、保守派に「めめしい」と非難される特質をスパルタの本質として横領しているのだ。『プラトン』の最終章は、唯美主義の道徳性にかんするペイターの最終判断が書かれている点で見のがせない。そのなかの一節では、「男性性」が「女性性」を反復して否定するか、それとの差異を示すかたちで、定義されている。つまり、前者は後者をたえず必要とし、それに依存していることが脱構築的に露呈されているのである。

(第七章) ペイターは文体家のイメージの書き換えも行なっている。とりわけ『マリウス』に登場するフレイヴィアンの人物像は興味ぶかい。その文学的実践は「病的な」ラテン語に活力を付与する愛国的な試みであるが、彼は疫病にかかり死ぬ。闘病中の記述には疫病との戦いをあらわす表現が頻出する。彼の愛国心や軍事的野望に比せられる文学的野心とともに、それは唯美主義者に投じられた「官能派」のイメージを転覆させる試みである。同時に、彼とマリウスとの親密な友情には同性愛的なエロスが書き込まれている。フレイヴィアンは、役割と特徴がたえず変化するために、単一の解釈によって消費し尽くされることのない人物である。

未完の作「イギリスの詩人」に出てくる「金属製の花細工」のイメージは文体の両性具有性を示唆するものである。『ガストン』でペイターは、登場人物ロンサルに保守派の非難するボードレールを重ね合わせつつ、唯美主義を「現代性」の芸術として擁護している。

(第八章) 短篇「家の中の子」(1878) はペイターの想像的画像の母体となる作品である。この作品では、「結語」における流動の思想や主観的精神の危険性が緩和されている。幼少期の家は精神の立脚点となり、思想を矯正し、そこで育まれた印象は一生のあいだ消すことはできないとされている。「結語」では個人にとって他者は「個性という厚い壁」の向こうにいる仮説的存在であるのにたいし、ここでは「共感」の重要性が強調されている。また、精神的実体を視覚的なものに移し変えてくれるキリスト教への感謝の言葉がしるされている。しかし、ここでのキリスト教があまりに感覚的である点に非難される余地があった。また主人公の感受性については「病的」で「疲労」をもたらすとされ、「めめしい」との評もあった。ペイターの保守派への譲歩とみえる記述は、かえって彼らとの対立点を鮮明にしているのだ。

この作品で奇妙なのは、インドで軍人として死んだ父がフローリアンにとっては恐ろしい亡霊としてのみ立ちあらわれることである。このことと、主人公の家があるらしい首都近郊の州が「イギリス人にとって真の風景」として称揚される記述とをつき合わせてみると、ここには植民地を拡大維持する帝国のあり方にたいするペイターの

不安が影を落としているようにもみえる。

(第九章) この問題への解答らしきものは「エメラルド・アスウォート」(1892)で示唆されている。ここには夥しい数の「イギリス的な」ものが出てくる。この形容詞に着目して主人公の生涯をたどっていくと、彼は「イギリスらしい」教育を受け、「健全なイギリスの若者」にふさわしい厳しさを自然に受け容れたかにみえる。J. トッシュによると、1880年代までにパブリック・スクールの少年たちには帝国主義思想が鼓吹され、彼らは家庭や家族への愛着を抑制するように求められた。エメラルドは、自制や団結心、規律といった「男性性」を獲得したかにみえる。しかし、泣くことをめぐる一連の記述をみると、エメラルドの従順さには不自然な抑圧がはたらいていたことが判明する。語り手は、主人公の内面の軋み、周囲の人びとの無理解などを簡素で微妙な言葉づかいで示している。軍人資格を剥奪されたエメラルドは、敵国フランスを放浪したのち帰郷する。彼には「戦勝」という言葉が理解できなくなっている。故郷の風景には当初「イギリスらしい」という形容詞が用いられていたが、ここではすべて定冠詞に代わっている。語り手はエメラルドの内面を反映させて、その形容詞を必要としなくなったのだ。結末には「反イギリス的」ともいうべき事柄がしるされている。この作品には、帝国主義下における「男性性」にたいするペイターの異議申し立てが刻印されているのだ。

以上、本論文は文体とそれに直結する問題をめぐるペイターの保守派との闘争とその戦略をあきらかにした。各章で必要に応じ分析したように、これらの戦略と切り離すことのできないのはペイターの文体、いわゆる「遅延の文体」である。それは構造上の晦渋さや意味を圧縮させた表現により読者を選別し、作家の意図に肉迫しようとする少数者を誘惑する。反復される言い換えや視点の追加の過程で、当の問題は複雑化され、対象の弱点は肯定されるべきものへと微妙に変化してゆく。これを「流動する文体」と呼んでもよい。「遅延の文体」にせよ「流動する文体」にせよ、いずれも消費(解釈)し尽くされて認知上の終結をむかえること、つまり「小さな死」への抵抗の表現である。結局のところ、ペイターの保守派との闘争でもっとも戦略的なのは、このような彼の文体なのである。

(論文審査の結果の要旨)

十九世紀後半の文人ウォルター・ペイター (1839-94) は、オスカー・ワイルドの唯美主義に強い影響を与えたことで有名だが、その著作が小説、随筆、文芸批評、美術批評、哲学など多岐にわたるという事実と、独特の難解な文体が、長い間研究者を遠ざけていた。しかし、1980 年前後によく風向きが変わり、以後は多くの研究成果が発表されている。作品の一つ一つが細かく吟味される一方で、例えばリンダ・ダウリングは、マックス・ミュラーなどの新しい言語学が十九世紀末の文体論に及ぼした影響を、人類学や政治学まで射程に入れて検討する野心的な論考『ヴィクトリア朝世紀末の言語とデカダンス』(1986)の中でペイターを中心的な存在として考察し、彼の特徴を、認識の終結をできるだけ引き延ばそうとする「遅延の文体」に見出した。野末紀之氏提出の本論文はこういった近年の知見はもとより、十九世紀の文芸雑誌に掲載された同時代の批評にも限なく目を配る入念なリサーチに裏打ちされた、優れた研究である。

ペイターの最初の評論集『ルネサンス —— その芸術と詩の研究』(1873)は、「結論」が非道徳的な享楽主義を標榜するものとして厳しい非難を受け、77 年の第二版ではその部分が削除されるに至る。また、この書物は内容と共にその晦渋な文体も批判の対象となった。本論の特色はこれまであまり注目されてこなかった、この文体批判に対するペイターの反応を丁寧にたどった点にある。『ルネサンス』に対する保守派の反論を契機に、ペイターはみずからの文体に対する意識を強くし、最晩年の作に至るまで、保守派との論争を続けていくことになるのだが、論者はその論争の本質を明らかにし、ペイターの戦略を詳細に分析する。そして、最終的に、よく言われる、保守路線に妥協する軟弱な美文家の代わりに、巧妙で時に大胆な論争家という作家像を提出する。

本論の力点はテキストの緻密な読解にある。例えば、しばしば論じられる難解な「文体論」(1888)についても、一部の研究者に見られるように、このエッセイから一つのきれいな結論を導き出そうとするのではなく、精読によって掘り起こした矛盾を矛盾として受け止め、そこにペイターの苦悩や過剰な自己防衛の痕跡を見る。

就中、全体の議論の核心をなす「文体のポリティクス」と題された第三章は読み応えがある。ジョゼフィン・ガイは『英国のアヴァンギャルド』(1991)において、ホメロス、ダンテ、シェイクスピアといった古典として価値の定まった作家たちを「横領」し、唯美主義の伝統に取り込み、次いで自らをその伝統に連なっていると主張することで保守派に反論するというペイターのレトリックを指摘した。論者はガイの画期的な研究を補完する形で、「横領」以外の戦略を明らかにし、文体にまつわるジェンダー・イメージをめぐるペイターの闘争について仔細な検討を加えている。特に「ロセッティ論」(1883)の分析において、「擬態としての譲歩」、すなわち論敵に対して譲歩するふりをしながら、実は敵の価値判断の基準を自分の都合のいいように書き換えたりして自己の基準に取り込んでしまう作戦や、度重なる言い換えによる焦点の拡散、さりげ

ない提示による挑戦的性格の偽装等、ペイターのさまざまな戦略を明確にした点は高く評価できる。

また、『ルネサンス』と『享楽主義者マリウス』(1885)とを比較した第四章も、ペイター研究の権威ビリー・アンドルー・インマンの見解に修正を迫る、興味深い議論が展開されている。二つのテキストの内容の同質性を主張するインマンに対し、論者はペイターの時間意識の違いに着目し、『マリウス』には『ルネサンス』に見られる、死が近いという切迫性は希薄であり、文体の遅延性もいっそう際立っていると言う。この反論はテキスト内の証拠によってかなりの説得力をもって提示されている。

ただ、「文体論」の問題点を抽出した第五章で検討される「男性性」の概念を後期ペイターのテキストに即して考察した、本論後半のジェンダーに関する論述は、近年しばしば行われる帝国主義言説と文学テキストを結びつける批評によく見られるようにやや機械的であり、特に「家の中の子供」(1878)において僅か一行でかたづけられているインド駐在の軍人である父親の死と、「エメラルド・アスワート」(1892)での「イギリス性」の概念を結びつけようとする最終章の論は強引さが目立ち、このことが論文全体にいささか竜頭蛇尾の印象を付する結果に終わったのは残念である。また、論者が指摘するように、ペイターが擬態を用いる時もあれば大胆に保守派に反論する時もあるとするなら、その戦略の違いが何故に生じるのか掘り下げがあってもよかったのではなかろうか。もっとも、こういった不満は論全体についての評価を著しく減じるものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成23年8月31日に、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。